柳田國男
倉田一郎 共編

分類山村語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジュームが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されるとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものでもあった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめていることに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髄に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

昭和五十年十月

国書刊行会

序

昭和七年の七月以後、及び同九年の八月から數回に亙つて、大日本山林會の雜誌に連載した山村語彙は、後に別刷にして數百部、同好の人々に頒布せられて居る。中にはあれを讀んで記憶を喚び起して、新たに訂正補充の資料を供與し、又はこの方面の事實に、改めて注意を拂ふやうになつた人も少なくない。今度の分類語彙は出來るだけ其援助を利用し、且つ前回の五十音順を改めて、成るべく關係のある言葉を一つ處に寄せて見ようとしたものだが、飲食衣服器物等に關する若干の名詞を別の集にまはした他は、前の集に出したものもすべてもう一度この内に加へて居る。それが全體の約四割ほどであらうかと思ふ。狩獵についての言葉などは、前にはまだ甚だ少なく、其後の採訪が進んだ爲に、可なり今は豐富になつて居る。昭和十一年頃から始まつた木曜會同人の山村旅行が、新たに此方面の知識を增加したことは、後世から回顧して見ても、恐らくは顯著なる事實であらうと信じて居る。

山村といふものゝ範圍は、必ずしもはつきりとして居ない。よほどの山奥に入つても畑を作り又田を拓き、專ら採取と捕獲のみによつて、生を營むといふ者は至つて少ない。曾ては純粹の山

民と稱すべき家もあつたらしいが、今は大部分が農家からの分れであつて、從つて全部の穀食を外部に仰いでは、不安を感ぜずには居られない人ばかりである。勿論山村の農作には、平地とはちがつた幾つかの特色はあらうが、次第に移り動いて居て其境目が立てにくい故に、便宜上その全部を擧げて、既に信濃教育會の農村語彙に載せて置いたので、もう此中には再出させない。一方には又村里の方でも、年内の或期間だけ、山に入つて山民の生活をする場合が多い。是だけは又區別無く此集の中に列記してあるから、正確にいへば寧ろ山中生活語彙といふ方が當つて居る。つまり農漁山村の三つの語彙は、各その一部分が重なり合つて居るのを、強ひて何れかに片付けて見たのである。日本の田舍の事實を、一通りは知つて居ると言ひたい人々は、やはりこの三つの語彙の、どの一つをも閑却することは出來ぬのみか、更に是等の生業の出發點となつて居る所の、家と村との組織、及びそれを動かす力としての、信仰愛情友誼等に關する古來の約束の、別に莫大なる言葉の數となつて、傳はつて居ることを忘れてはならぬのである。

たゞさういふ多くの語彙の中では、殊に山中の事物の名に、古い生活の名殘が色々と傳はつて居ることを、我々は感ぜざるを得ない。人が新たに世に交つて、自ら體驗して行くものゝ印象は強烈である。時としては父祖傳來の奥深い記憶を、片隅に押し遣るほどの力をさへ持つて居る。

さういふ新たな印象を重ねる機會が、山の中では得られない故に、自然に今まであるものだけを守り養ひ、又は少しづゝ引伸ばして行くことになつたのかと思ふ。世界に稀なる山國であつたといふことは、我日本を意外に古い風習の數多く殘つて居る國にしたのだが、此狀態は果してなほ續くかどうか。新らしい文化は平野を花やかにし、山へは又色々の旅人が入つて行く。戸口の今日のやうな增殖の中ですらも、日に日に谷底の小さな部落、又は峠の上の一軒家といふやうなものゝ數を減じ、老いたる狩人や岩魚釣りなどの、默つて一生を暮らしたといふ人々は去つて行つて、もう其代りの者は出て來ようとせぬのである。分類山村語彙の多くの言葉が、永遠に忘れ去られる日は近い。何だかもう既に無くなつてしまつたものが、大分に有るのではないかといふ氣もする。急いで之を存錄する事業に、參加する人々を今少しく多くして見たい。それがこの本をやゝ不完全なる形のまゝで、一たび世に出して見ようとする我々の動機である。

我々の語彙に出て居ない一つの言葉が有るといふことは、大抵の場合には一つの事實の、今まで氣付かれないものが見つかつたことを意味するのみか、時としては說明し得なかつたことを說明する手掛りになる。既に採集せられた一語の、又他の土地にもあつたといふことは、事實を確かめるだけで無く、なほ其由來の遠いことを推測せしめる。同じ言葉の解釋の少しづゝのちがひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は、誤謬を正す以上に、又考へ方の變遷を跡づけしめる場合もある。わざ〳〵力を入れて問ひ試みるまでの勞苦を費さずとも、たとへば路上の草の花が目を惹くやうに、自然に耳に留まつたものを記憶して來るだけでも、それだけ日本の前代生活は、痕を次の代に印するのである。今後の活潑なる山地旅行家に、たゞこの人生現象の興味を感ぜしめるだけでも、もう一つの仕事では無からうかと我々は思つて居る。二十年に近い自分たちの勉强が、たつた是だけの語彙にしかならなかつたといふことも、之を考へると必ずしも失望すべきでない。

終りに我々兩名の分擔を明かにするならば、此語彙の蒐集には多數同志の協力が加はつて居るが、之を選定し又一應の排列を試みたのは自分であつた。倉田君は其初稿を整理繕寫して、現在の形にこしらへた上に、更に數回の校正と索引の製作を引受け、私をして容易に收獲の悦びを味はしめた。此問題に對する興味の增加と、新たなる經驗の蓄積とが、同君他日の輝かしい學業の素地をなすならば、その隱れたる勞苦は始めて償はれたと言ひ得るであらう。

昭和十六年三月

柳田國男

分類山村語彙目次

序文

一、土地

一、地形……一
二、林野……三五
三、山林管理……四〇

二、採取

四、草刈……四九
五、蚊火……五三
六、落葉掻……五七

七、採取物占有……五九
八、採取物……六三
三、林業
九、植林……九六
一〇、伐採……九八
一一、特殊樹木稱呼……一〇四
一二、一般樹木稱呼……一一五
一三、製材……一二三
一四、木印……一三〇
一五、運材……一三五
一六、林業用具……一四五
四、山仕事
一七、採薪……一五六

一八、炭燒・炭竈……一六五
一九、木地屋……一七七
二〇、山小屋……一八一
二一、杣職・山師……一八八
二二、特殊の山仕事……一九四
五、禽獸
二三、鳥獸名……二〇三
二四、獸害除け……二三八
六、狩獵
二五、單純狩獵……二四六
二六、狩人・狩獵組織……二七三
二七、狩獵用具……二八二
二八、共同狩獵……二八八

二九、獲物の分配……三〇一
三〇、獣の肢體……三一〇
三一、狩の作法・祭儀・俗信……三一九
七、山の信仰
三二、山の神……三四一
三三、山の怪異・俗信……三六一
索引

山村語彙

一　土地

一　地形

ウレ　高山の絶頂に近いところ(駿河安倍郡誌)。木の梢などのウレも同じ語である。山奥の村の地名にミウレといふのは水上のこと、サウレはサハウレ卽ち溪の奥と解せられる。

ヲサ　紀州日高郡の奥などでは、谷底から峯までの高さをヲサといひ、ヲサが高いといふ語もある。ヲサは機具の筬の齒だけでなく、數多く竝んだ田の區劃をも一ヲサ二ヲサと算へ、又蕈類の裏面の切れ目もヲサである。群の頭目をも村ヲサ・船ヲサなどゝ呼んで居るのが、元は一つの語の適用らしい。

ホソ　三河遠江から信州南山にかけて此語がある。峯とも峠とも譯せられて居るが、精確にいふと嶺背・山脈の末端の突出た部分で、他の地方でツルネといふに該當するといふ(方言六卷一二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

號)。斯ういふ簡單な高地は越えて行かれるから、或は之を峠だと謂つても誤りではない。

トツケ　關東の山地では、峯の尖りをトツケといふ處が多い(山岳二〇卷一號)。やはりトガリと同じ語であらう。

クキ　茨城縣の北部から福島宮城にかけて此語があり、峰もしくは峠のことだと謂つて居る。漢字の岫をクキと訓む爲に、山の洞ある處などゝ辭書にはあるが、少なくとも今知られてゐる實地の例とは合はない。

トホリヤマ　中國以西にはこの地名が多い。岡・小山を越えて行く處だから、通山と字に書いて居るのが地形とも合するが、起りは實は「たをり山」である。タヲリといふ語は新撰字鏡にも既に見えてゐて、山の嶺の外線の一處低くなつて居るものだけで無く、其側面の引込んで平地の奥まつた處、又は川の岸の屈曲した處も、皆太乎利又は井多乎利と謂つたやうである。越後の北魚沼でも、山の傾斜面を迂廻して登ることを、タヲル又はタヲツテヌブルといふ。他の山地でマク・カラム、又はヒヂヲツテノボルといふのも同じ意である。

トウ　四國で一般に峠をト又はトウといふのはタヲである。南九州にも有名な肥後から日向への嘉久藤などがあり、關東の上州吾妻郡などには何のトウといふ山越が多い。大和の多武峯もタ

ワムの意であることを、扶桑記勝などには述べて居る。峠のタウゲも手向けから出た語ではなくて、タワゴエのつまつた音であるといふ說は正しいと思ふ。

タワ　紀州の熊野地方は一般に、峯續きの低くなつた部分をタワといふ。獸類はこのタワを越すものだと謂つて居る。吉野の北山でも二つの峯の間を入山形といひ、その低部を特にタワといふが、谷の奥の水の無い處をもサコもしくはタワと謂つてゐる。中國地方は峠をタヲといふ方が多いが、備後の東部深安・比婆等の郡だけは之をタワと呼び、島根縣でも石見の方はタヲだが、出雲ではタワと謂つて居る。

タヲ　峠をタヲといふ語は四國九州の一部にも及んで居るが、中國で最も普通であり、漢字には乶といふ字をこしらへて用ゐてゐる。嶺の線の撓んで低くなつた部分だけで無く、往々にして横の屈曲にも用ゐられ、たとへば長門の阿武川筋などでは、斷崖の中腹に切付けた路の曲り込みの處も亦タヲである。信州遠山地方では、山中渡り鳥の通過する場所をタゴと呼んで居るが、是もタワの訛りらしい。下野安蘇郡の山村で、さういふ鳥網の裝置を設ける地形をタアといふのもタワであつて、この二つの發音は一語の地方差かと思はれる。

ソネ　關東から福島縣にかけて、嶺をソネといふのは古くからのことであつた。中國地方にも

此語が廣く行はれ、嶺とは謂つても主として低く長く續いたものをさすやうである。俚謠集の歌の中にも、

我がとのは夕草刈りに行かれたが
かのソネソネが思はれる（石見邇摩）
大山の七たに八ソネ吹きあらす
さぞや米子もさぶからう（備後比婆）

などゝいふのがあつて、ソネを谷と對立させて居る。或は碩又は塢の字を宛てゝ、膏地のことだといふ土地もあるが、それは斯ういふ山地には石の露れたものが多いからで、イソといふ語との關係も考へられる。海中の隱れ岩の列をソネといふ例は、安房上總の海岸にも北九州の方面にも、又諏訪の湖上にも現存する。海と山との地形語に共通のものは至つて多い。

ウネ　現在は畝の漢字を宛てゝ、主として畠作の用語のやうになつて居るが、本來は斯うして小高く連つたところが、大小によらずウネであつたらしい。現に南島の地名には嶺と畝とは共にウネである（日本文化の南漸）。中國地方では弘く丘陵の高みの續いたものがウネである。「なぜに耳が長いぞ」といふ兎の童謠にも、

ウネのさうも聽きたし
たにの左右も聽きたし

などゝいふ文句があつて、常に谷と對立する語として用ゐられて居る。安藝などではウネリともいうたとみえてゐる(蕉齋軍記、四)。ソネとウネとの相異はまだ明かでないが、少なくとも二つ併存した例は少ない。ソネも或はウネにソが附いたものかも知れぬ。關東地方でオネと謂ふのも、尾根ではなくてウネの發音差かと思はれ、之れも畠のウネと區別する爲に、わざと設けた變化だつたらしい。越佐方言集にはウネは嶺、又は頂上のことだと謂つて居る。多分越後にもオネと謂はない處があるのである。

ヲバネ　連嶺をさういふ地方は相應に廣いやうである。薩摩下甑島の南端でも、山の高くなつた所がヲバネで、之に對して低い部分がサコである。語の起りは明かでないが、ウネと關係のあることのみは察せられる。關東の方でも畠の高い列がウネで、是に對して低い所がサクであり、其サクは同時に谷あひの意にも用ゐられて居る。サコの條參照。

ツリ　磐城の東白川地方で、ツリといふのは嶺筋のことであり、境の山をツリザケェともいふ。他の多くの地方にはツルネといふ語がある。ツリは蔓と同じで長く延へるものゝ名で、ツルネは

即ち是にウネを添へたのかと思はれる。

ギスギ　山の風當りの烈しい處をいふ(會津)。

テングノロヂ　山の嶺近くに岩あり芝あり這松などの生えて居る處を、信州南佐久郡ではさういふ。ロヂは此地方でも人家の庭園のことで、即ち天狗の庭好みをした處の意である。山中の地形の常に異なつたものには、天狗に托した名が多く出來て居る。

ガンノハラスリ　高山の嶺のやゝ低くなつた部分に、雁の腹摺りと名づけた例は稀でない。甲州牛奥山の一峯にも此名があつて、現に秋の雁の列がこゝを越えて來るといふ。或は養の河原とも呼んで居たから(山岳二〇卷二號)、人もこゝを越えたものと思はれる。

ミノウ　筑後川左岸の連嶺には何々ミノウといふ名が多く、何れも郡村の境の線をなして居る。ミネといふ語から出たかとも思はれるが、字には必ず耳納と書いて居る。東部日本で屏風山と呼ぶものと同じく、外線の變化の少ないのが特徴になつて居る。下甑島にもホトケミノウなどの山の名があつて、こゝを交通路にもして居るやうである。

ミヅコボレ　水驟れ、分水嶺のことである。中部地方の山村で、山林の境などについて、水こぼれ堺といふ語が屢々用ゐられる。一滴の雨でも流れ落ちる方向が定まつて居て、左右の區域が

おのづから判るといふ意で、考へのある名の付け方である。

ミツオチキリ　能登の鹿島郡などでは、分水嶺を水落切りと謂つて居る。

ツチコロビ　大和の十津川で土轉びといふのは、水分れ卽ち嶺の背筋のことである。土が落ちどころによつて必ず一方へ轉ぶからといふ。是も部落や林地の堺の標識としたものであらう。

スバル　山のウネの二つ以上突合つた處を、紀州西牟婁郡でスバルといふ。スバルがもと集合することを意味する語であつたことは昴星のスバルボシ、又は水底に物をつかむスマルといふ鐵具の名を見てもわかる。

ソデ　山の嶺の向う裏を、阿波祖谷山ではソデ、天龍川上流地方などでもソンデといふのは、外をソト又はソトモといふ語と一つであらう。古くはソガヒとも謂つてゐる。

アテラ　安寺・阿寺など丶字には書いて、多くの山間の地名となつて殘つて居るが、もとはソンデと同じに嶺のあなたといふことで、乃ち第二次の比較的不利なる利用地であつたことを意味する(地名の研究參照)。加賀の白峯村などでも山を向うに越すことをアツテラへ行くと謂つて居る。信州遠山では戸棚のアテに在るなど丶、單に上といふ意味にも使ふといふが(方言六卷一一號)、是も恐らくは下から見えぬ所をさういふのであらう。是から轉じては日陰の山(武藏西多摩)、又はたゞ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.